

古文書紹介

島津家文書に

「竹のうら」「御手洗玄蕃」をみる

三股 廣 喜

(会員 佐伯市新女島)

その古文書をインターネットで種々調べたところ、系図以外での最も古い記録であると思われる。

この時期「佐伯 榎牟礼」の城主は「佐伯惟定」の時代で、島津との「堅田合戦」の二年後のことであり、秀吉により平定され、「島津義久」の代わりに上洛する「島津義弘」の道中日誌でもある。

原本は、島津家文書之三、島津義弘書状(東京大学史料編纂所蔵)であるが、後刊「薩藩旧記雑録」が理解しやすいので、以下はこれによる。

※薩藩旧記雑録

江戸時代後期～明治時代にまとめられた文書集で伊

地知季安・季通自筆の稿本、天正一六年六月六日の島津義弘書状は、旧記雑録後編二二二巻に収録されている。

その書状を読むと

天正一六年閏五月には、「竹のうら」という地名があり、「御手洗玄蕃」が住んでおり、島津家の御座船、武將を五日間も泊めるような屋敷、宿があった事。系図以外でこの時期「御手洗玄蕃」という人名、「蒲江」「ほそくし」「竹野浦」「ほと崎」という場所が見られる。最も古い書状であると考ええる。

去月廿六其許罷立、打續風雨に、此方彼方ニやすらひ、漸晦日佐土原まで越着、今月三日從徳之口出船、折しも神なりさハき、雨風打しきりたる、船中いかなる事もやあらんなど心遣せしに、ほとなく雨の足しつまり、おもふ方の風さへ吹そひて、其日の西之剋にほそ嶋へ到りぬ、昔二かハりたる所の人のもてなし、けにもと見えながら、天氣惡によりて、日ひとひ逗留し、五日寅之剋出船、豊後佐伯之内蒲江と云る所へ漕入けるに、おりしも渚ちかく野狐さき立て、旅宿の後の山へ入、其夜のこゑ枕近く、目さましか

ちに明し侍り、彼在所ハむかし社軒ヲならへし家居もありけれ、豊・薩干戈以来となりさへよひかハすほとに遠さかり、あやしき藪の中に二三人住けるとまやのはい入に、両日雨にこもり、身ハならハしのことの葉おもひしられはつへりて、八日卯之剋二出船、未の刻二ほそくしと云る所二船かゝりして磯山に柴おりかけ、よるのしほときつくりて、こぎ出へきもよほしなりしに、俄にかきくもるけしきなれハ、たけのうらと云る所へをし入、御手洗玄蕃と云る人の在所二とゝまり、日ひとひありて、十日辰刻二をし出し、一里はかりゆきて、波風あらたちしにより、又こきもとり、もとのあるしのけしきとりて、二日ハ順風なく、つれつれとこもり居侍り、所の名を題にて、永純、葉かくれにやとりやすらんすゝめかひ竹のうらこす浪にとひきて、十三日辰之刻二舟出しける二細嶋へのこしをきける供の衆追付、類船にてきはゝしく、ほとゝ云る所に付ぬ、彼ほと崎とて、瀬渡浪あらき事はほも山もうこく計におそろしかりし事也、十四日塩をまちて、豊後渡をわたり、さた崎とて、又塩あひあらき浪まを分過るほと、半道とおほゆ、其日の亥刻二伊与のうちふたとゝ云る所に舟かゝりして、永純、すゝしくも風吹とをすふた窓やに

しにひかしの月をみるらん、それよりやしる嶋と云る所に塩かかりして、永純、おほ海の神やつくりてすみぬらん波のうへなるしる嶋をハ、十五日未之刻二舟出し、遊る嶋と云る所にしほとき作りてやすらひけるに、そこなる神社を矢たての神といへり、此程順風ハなきに、しほ時つくりて船ちいつく共なきに、神のやハらく事もや有なんとすゝめけれハ、永純、あつさ弓いるよりはやく行舟や矢たての神のめくミなるらん、それより順風時の間に吹立て、神のしるしを眼前に見侍りて、二神の嶋をとをるに、茶屋宗次郎かこ嶋打立之名残などいひ出、追風にのほりくたりの舟のうへいのる祈や二神の嶋、とよみて、返しせよ、とせちにいひしかハ、予、船ミ地の登りくたりにおもふ人二神の嶋にいのりやすらん、永純、鳴々を明て見せたり玉くしけふた神の海の四方の波間に、さてつわちと云る所をとをる二、永純、舟に駒あらそひてこそいそくらめのとをすなりくつわちの浦、さて蒲刈のせとをとをる二、永純、心なきあまなりけりな咲にほふ玉藻の花をかまけりにして、愚も又、すゝしくも南の風に棹さして猶みるふさをかまかりのあま、又さしのほるしほちすゝしかりしかハ、登りゆく塩に涼しき船路哉、其日ハ舟にてくらし侍

り、十六日安藝の内高崎と云る所にて夜明はてぬ、さてゆきゆきて田嶋と云る所をとるに、永純、海かけて植し田嶋が深ミとり、十七日海ちかく差出たる岩ほの上に観音堂有り、あふとの観音と云る、永純、わくらはにとふ人あらハ観音もみちくる塩をあふと答へよ、さてそれより備後のとも一見して、舟を出し、夜に入れぬ、十八日巳之刻二讚岐の内塩飽嶋二至り、船頭助次郎所に宿、十九日亥刻二舟出し、海上にて夜を明し、うしまと、云る所を過、家嶋と云る所にて、永純、岩を壁松を軒端におり葺てす、しかるらしまあまの家嶋、愚も枕より跡より波やよせくらんあれぬ方なきあまの家嶋、又永純、住の江の松のあらしのす、しさをあはちにかよふ奥つ白波、それより兵庫嶋に廿一日子之剋二至り、廿二日堺より伊勢雅楽入道来り遂熟談、廿三日夜をかけ堺之津へ着船、北之神明町經王寺と云る法花寺へ宿を定、又一郎へ遂見參、喜悅之躰可有推察候、恐々謹言

六月六日

義弘

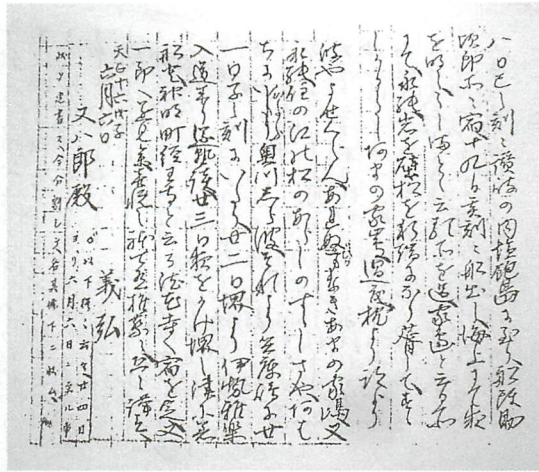
又八郎殿

雜曲抄卷中九行或

天正十六年四月十六日
五月五日
六月十日

五月十日
六月十日
七月十日

五月十日
六月十日
七月十日
八月十日
九月十日



この「島津義弘書状」により、天正十六年（一五八八）の島津家十七代藩主「島津義弘の上洛日記」をまとめると次のようになる。

「島津義弘の上洛日程」

閏五月 三日 朝 佐土原 徳之口出船

五月 三日 夕方六時 細島着 泊り

(一)の間 五〇キロ

五月 五日 午前四時 細島発

夕方六時頃、蒲江に到着。旅宿に泊り（この間、約五〇キロ 十四時間かかり時速三、五キロ。向い風の厳しい航海が何える。）

五月 八日 午前六時 蒲江発

午後二時 ほそくし に船かかり
（ほそくしとは、現在「間浦・細越」と呼ばれている地名が米水津湾に現存し、竹野浦とは対面位置にある。）

夕方時化となり出船出来ず、たけのうらへ。御手洗玄蕃へ泊り。

（たけのうらとは、旧米水津村竹野浦の事で、御手洗玄蕃とは当時下浦を管理する職にあつたと思われるが、玄蕃信恭か玄蕃信好かは不明。御手洗家墓地に「壽岳」慶長九年没の宝塔が現存し、玄蕃信好は元和二年没。）

(註) 閏五月十日を新曆に直すと七月三日とな

り佐伯地方の日の出は〇五時一〇分、

日の入りは一九時二五分。
五月十三日 午前八時 たけのうら登
細島からの類船と合流。ほと崎にて潮待
ち。

五月十四日 ほと崎発、豊後渡し(速水瀬戸)さた崎に
到着。午後十時、ふたま(双海)に船かか
り。その後、やしろ嶋までいき、船かかり。
(強い向い風で直進出来ず厳しい航海が
続く)

(註) 五月十五日を新暦に直すと七月八日とな
り、四国松山の日の出は五時五分。日の入
りは十九時二十分。暗くなるのは二十一
時十分。

五月十五日 午後二時、やしろ嶋船出し
ゆり嶋↓二神嶋↓つわ嶋↓蒲荊嶋といく
高崎(竹原の近く)にて夜明けとなり、そ
の後、田嶋↓鞆を通る。

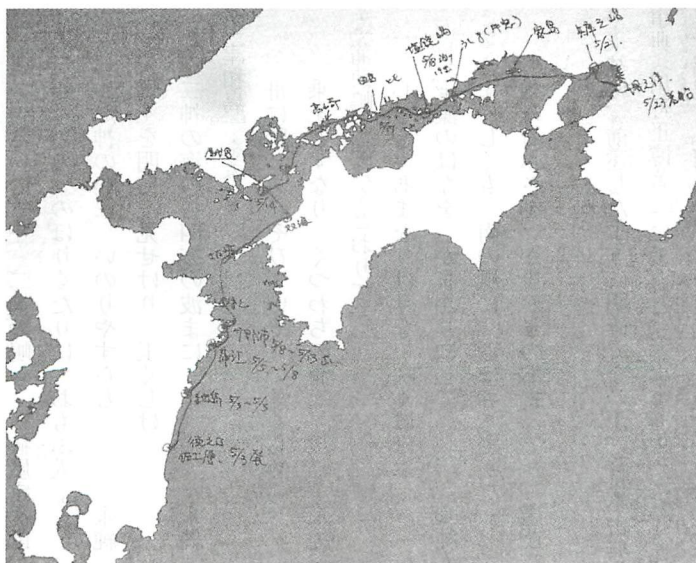
五月十八日 午前十時、塩飽嶋に到着。船頭宿にとま
る。

五月十九日 午後十時、出船、うしまと(牛窓)↓家

島を通り、

五月二十日 夜中十二時 兵庫之嶋に到着。

五月廿三日 夜堺之津へ着船。法花寺へ宿を定める。



天正 16 年 島津義弘 上洛海路

また、文中に「所の名を題して」との連歌がある。
その作者「永純」が誰であるか未だ不明です。文書中に出
てくる「永純」の連歌の一部を紹介する。

(旧記雑録後編2より)

所の名を題にして

・「豊後竹野浦」にて

葉かくれに やとりやすらむ すゝめかひ

竹のうらこす 浪にとひ来て 永純

・「予州 双海」にて

すゝしくも 風吹とをす ふたまとや

にしにひかしに 月をみるらむ 永純

・「やしる嶋」塩かかりして

おほ海の 神やつくりて すミぬらん

波のうへなる やしる嶋を 永純

・「ゆり嶋 矢たての神」をみて

あつさ弓 いるよりはやく 行船や

矢たての神の めくミなるらむ 永純

・「二神嶋」を見て

追風に のほりくたりの 舟のうへ

いのるいのりや 二神の嶋 篠屋宗次郎

船みちの のほりくたりに おもふ人

ふた神の嶋に いのりやすらむ 永純

嶋々を明て 見せけり 玉くしけ

二神の海の 四方の波まに 永純

・「津和島」をみて

舟に駒 あらそひていそ いそくらめ

乗をとすなり くつわちの浦 永純

・「蒲刈嶋」瀬戸をとおりて

心なき あまなりけりな 咲くにほふ

玉藻のはなを かまかりにして 永純

すゝしくも 南の風に さほさして

猶みるふさを かまかりのあま 愚茂

永純は、前述したように明確でないが、「日本古典作者
事典(川野正博著)」によると、天正十七年(一五八九)年
里村招巴と「何人百韻」の会を、翌、天正十八年(一五九
〇)年大村由己亭の歌会に参加しているとある。